

この世の評価、価値は、努力した者、頑張った者のご褒美をもらえる、評価されるという形になっている。私たちはこの世の価値観でそういう評価をしてしまふ。それが良し悪しかは、ケースバイケースであるかと思う。では、聖書はどうか。マタイ福音書 20 章に記されている「ぶどう園の労働者」のたとえ話には、主人は一日につき一デナリオンの約束で、労働者をぶどう園に送った。朝から働いた者も、夕方 1 時間だけ働いた者も報酬は同じく一デナリオンであった。しかし、この世の価値観では、朝から一日働いた人と1時間しか働かなかった人と同じ報酬というのは、ちょっと有り得ない。聖書の教えには、この世の価値観では計れないものがある。この世の価値観で聖書を見るならば多くは躓く。

ある人が尋ねた。《永遠の命を受け継ぐには、何をすればよいのでしょうか》と。この「何をすれば」とは、この世の価値観で物事を考えているということがわかる。どんな修行をつめば「永遠の命を勝ち取ることが出来るのか」ということ。イエスは律法(聖書)の言葉を持ち出した。しかし《彼は、「先生、そういうことはみな、子供の時から守ってきました」と》答えた。次に《イエスは…「あなたに欠けているものが一つある。行って持っている物を売り払い、貧しい人々に施しなさい。…それから、わたしに従いなさい。」》このことは、「善行を成せ」ということを言いたいのではない。人の出来ないこと、人間の限界というものに本人を出会わせようと、イエスはされたのだと思う。そして、そのことに気づかされて、「わたしに従ってきなさい」という言葉に赦しを覚え、慰めを受け、共に歩んでくださるイエス様に励ましを受けていく。そういう出会いに、イエスは「この人」も導こうとされていたんだと思う。大事なことは、自らの罪に気づかされて、イエスに従うことである。

《神の国に入るのは、なんと難しいことか。金持ちが神の国に入るよりも、らくだが針の穴を通る方がまだ易しい。》これは、もっとも不可能なたとえとして用いられている。弟子たちが「それでは、だれが救われるのか」というのは当然である。イエスは、弟子たちからその言葉を導いたということである。人間がどんなにお金を積んでも、善行を積んでも、修行を積んで努力をしても、人間が神の国に入ることは出来ない。「それでは、だれが救われるのだろうか」。《人間にできることではないが、神にはできる。神は何でもできるからだ。》

このことは、私たちの方から努力して神の国に入るということではなく、神の国の方が、私たちを招き入れてくださるということである。(神谷)